

宇喜多一蕙——復古大和絵の絵師たち・その二

津木林 洋

一

宇喜多一蕙は妻の花、息子の松庵しょうあんと共に、伏見にある瑞光寺の萱葺屋根の表門をくぐった。昨夜来の雨も明け方には止み、参道の石畳のくぼんだところには小さな水溜まりが残っている。雨に洗われたせいかわ、両脇の植栽の緑が艶やかに光っている。

本堂が目に入ってきて、一蕙は立ち止まった。表門と同様の萱葺屋根でこぢんまりとした本堂は、名利に恬淡てんたんとしていた師・田中訥言の法要を行うにはふさわしいと彼の目に映った。

本堂の扉が開け放たれ、飾り付けのため忙しく立ち働いている僧侶たちの姿が見える。近づいていくと、住職が気づいて中から出てきた。

「雨が上がってよろしおましたなあ」と住職が空を見上げた。

「これも田中先生のご加護のお陰と思っております」

そう言っで一蕙が両手を合わせると、「ほんに」と住職も合掌した。

天保六年（一八三五）の今日、三月二十一日は、訥言が死んでちょうど十二年目に当たる。

三回忌や七回忌の時は、一蕙の画名も高くなく、松庵が生まれたりして金がなかった。それで自宅に数名の知人を集めて僧侶を一人呼んだだけだった。その時から、十三回忌には師にふさわしい法要を、この手で執り行いたいと願ってきたものだった。

それが今日実現しようとしていることに一蕙は感慨を覚えた。思えば、自分がこうして一角の絵師になれたのも先生のお陰なのだ。

十三歳の時に弟子入りし、土佐家にある粉本の模写から始まって、古画や古絵巻物の模写で線描を、草花や鳥の写生で筆法の生かし方を、さらに

は唐画で水墨の技を学んだ。学んだというより、訥言の修練の姿を見よう見まねで追っている内に身についたという方が正しいだろう。

訥言が舌を嚙んで自害した時、塾で教えを請うていた頼山陽と共にその死を看取り、葬儀を取り仕切ったのも一蕙だった。その後、土佐家の門人から、訥言には息子がいたはずと聞かされた一蕙は、その母親の生家である小間物屋を探し当てた。訥言の離縁したお市はすでに亡くなっており、息子の佐市良は江戸にいますという。そこで一蕙は佐市良に手紙を書き、弔いはこちらで懇ろに行ったが、年忌はぜひとも主になって執り行って欲しいと頼んだ。

しかしそれに対する返事は来なかった。三度出したが、梨の礫だった。それで一蕙はすべての年忌を自分で行うことに決めたのだった。

本堂に上がり、一蕙と花は飾り付けを手伝い始めた。正面の釈迦如来座像より一段下がった左側に土佐行秀筆の妙音天像を掛け、右側には谷文晁筆の田中訥言の肖像画を掲げた。十歳になる松庵も僧侶の指示に従って桜と山吹の造り花を飾っている。一蕙はその前の棚台に香炉や大乘妙典を置き、その横に訥言の模写した伴大納言絵詞三巻の入った桐箱を置いた。

昼前に、頼んでおいた四人の楽師が到着し、礼座の横に並んで坐る。彼等が琵琶や笙、笛を取り出し、音を合わせ始めた頃、羽織袴姿の香川景樹が姿を見せた。楽師と打ち合わせをしていた一蕙は足早に近づいた。

「先生、ようこそおいで下さいました」

景樹は一蕙が歌の手解きを受けている歌人で、訥言とも長年親交があった。

「訥言殿は一蕙殿のような弟子を持たれて幸せでありますな。このような立派な法要を営んでもらえることはそうそうあるまいて」

景樹は正面の飾り付けに目をやって、何度も頷いた。そして懐から短冊大の紙を取り出すと、一蕙に手渡した。

「今日のために一首詠んで参りました」

一蕙は受け取った料紙を押し頂くようにしてから、おもむろに四つ折りのそれを開いた。

「宇喜多一蕙ぬし今年訥言先師の十三回忌に当たれりとて、深草なる瑞光寺にて其追福宮まれける。随喜にかへずよみて奉りける一首

香川景樹

今そしる晝はそらごとなりというめるは

雲井にのこる名こそありけり

」

確かに絵は空事に見えるかもしれないが、師訥言の名は内裏に残っているのだ。一蕙はそれを二度読み、「ありがたいことでございます」と再び頭を下げた。

料紙を畳んで正面の棚の端に置いていると、松庵がやって来た。

「父上、梨影様がお出でになりました」

梨影とは三年前に亡くなった頼山陽の妻である。松庵を連れて堂の外に出ると、階段の下に梨影が三樹三郎を連れて佇んでいた。こちらを見上げて頭を下げる。一蕙は階段を下り、「ようこそお参り下さいました」と辞儀を返した。

「私一人で来ようと思ったのですが、この子がどうしても言うものどすから」

三樹三郎は隣の松庵と何やら目配せをしている。一歳しか違わないので気が合うのだろう。去年の山陽の三年祭の時も二人して遊んでいた記憶がある。

「松庵、三樹三郎殿を案内してあげなさい」

松庵は「上がろ」と声を掛けて階段を駆け上がっていく。三樹三郎はもどかしそうに草鞋の紐を解くと、松庵の後を追った。草鞋の片方がひっくり返っている。

「三樹三郎、履物をきちんと揃えなさい」

梨影が叱っても三樹三郎は振り返りもしない。梨影は溜息をつけて草鞋を揃えた。

「又次郎とちごて、ごんたで困ります」

「いや、今の世の中、あれくらい利かん気でないで大成しないのはありますまいか」

「そうであつたら、よろしおすけど……」

昼過ぎに法要が始まった。参列者は三十人ばかりになった。僧侶たちに混じって一蕙も礼座に控え、法華経二部を読経し、供華捻香を型どおりに行った。その後、三台塩や老君子の楽曲が演奏され、続いて香川景樹が自歌を朗々と詠じた。

終わって参列者が庫裏横の広間に移動し、お齋とぎが振る舞われることになった。

二年ほど前から始まった陸奥の飢饉がこのところ全国に広がっており、米の値段が急騰していた。それに合わせるようにして他の野菜、魚等も値を上げて、食材を調達するのに一蕙は苦勞した。それでも訥言先生の回忌で不調法はできないと一ヵ月も前から鮎あせずしや鮎あせ粕漬あせけを買い求め、今日に備えたのだった。

一蕙は景樹や楽人たちに酒を注いで回り、参列の礼を述べた。一通り参列者に挨拶をし終わった頃、一人の若にやくそう僧そうが一蕙を呼びに来た。

「お客様がお見えになりましたが」

はて、主立った客人はすべてお出でのはずだが。一蕙は心当たりのないまま、若僧の後について本堂に向かった。

階段下に小袖姿の年寄りと立たて烏えぼし帽子、小直このうし衣姿の男がいた。どこかの公家が参ったのかと一蕙は驚いて階段を降りた。二人とも見知らぬ顔である。小直衣姿の男は上背はあるが、ひよろつとしていて、顔立ちは一見、童女わらめのようだ。松庵よりいくつか年上にしか見えず、立烏帽子小直衣を着るような年齢とは思われない。

「私が宇喜多一蕙ですが、何かご用でございますか」

年寄り年寄りは道帽と呼ばれる頭巾を取ると、一礼した。

「わたくし、北川梅ばい價かという俳諧を嗜む者でございます。こちらで田中訥言先生の回忌法要が行われていると聞きました、是非ともお参りをさせていただきますたく……」

「爺は付き添いです。是非にとお願いしたのは私でございます」

少年が深々と立烏帽子頭を下げた。北川という公家の名前は聞いたことがない。

「どこかの公家のお方でございますか」

一蕙が尋ねると、年寄りはいつという表情を見せた後、すぐに相好をくずした。

「この晋三の服装は……」と年寄りが言い掛けると、「爺、永恭えいきょうです」と少年が口を挟んだ。

「おお、そうであった。晋三は元服したのであったな」

「この服装は」と少年が年寄りの言葉を引き取った。「田中訥言先生が古画の模写を通じて大成されたことに敬意を表して、有職故実ゆうそくこじつに則った正装をして参った次第です」

永恭の足下を見ると、黒漆を塗った木沓きくつらしい物を履いている。一蕙の視線に気づいたのか、

「これは境内に入る前に草鞋から履き替えました」

と言って永恭がはにかんだ。

そこまですることに一蕙は感激して、

「それはそれは、有り難いことで。回忌の儀はすでに終わりましたが、まだ礼座は片付けておりませんから、どうぞお参り下さい」

と二人を本堂に上げた。

二人が礼座の前に腰を下ろし、焼香をしようとしたので、一蕙は「火をお付けいたしましょう」と立ち上がりかけたが、「いいえ、お構いなく」と梅價が制した。

二人は抹香を摘んで火の消えた香炉に入れ、合掌した。永恭は頭を上げると、谷文晁の田中訥言肖像画をじっと見た。

「田中先生が古画の模写をしていたことをよくご存じですね」

と一蕙は声を掛けた。永恭がこちらを振り返る。

「先生の絵を初めて拝見したのは、祇園社でございます。応挙の鶏を見に行ったのですが、その時障子の腰に描かれた先生の若松を見て、すっかり心を奪われてしまいました」

「この子は」と梅價が口を開いた。「私の娘が嫁いでいる狩野永泰えいたいという絵師の息子なのですが、それ以来大和絵にのめりこみまして……」

狩野永泰は京狩野の流れを汲む絵師である。

「永泰殿のご子息でありましたか」

「永泰をご存じで……」

「ええ、もちろん。展観で何度かお目に掛かったことがございます」

「それはよかった。この子は本来なら狩野を継がなければならぬのですが、自分は大和絵に進むと言って聞かず、古い寺を回っては絵巻物や杉戸絵を模写しておるのです」

一蕙は立烏帽子を被った永恭に目を移した。

「それはまさに田中先生が若い頃に行っていた修行そのものですね。いやあ、若いに似合わず大したものです」

「どの寺に行きましても田中先生が模写に訪れたという話が残っております、自分はまだまだ修行が足りないかと痛感させられております」

そう言うと、永恭が礼座の棚台に目をやった。

「あれは田中先生の模写された伴大納言絵詞でございますか」

「そうです。先生が心血を注いで模写したもので、私の宝です」

「拝見させていただいてもよろしいでしょうか」

永恭が遠慮がちに言った。

「よろしいですとも」

一蕙は棚台から桐箱を両手で取ってきて、組紐を解いた。蓋を開け、一巻目を手に取り、巻緒を解いて二人の前に三寸ばかり広げて見せた。永恭が息を呑むのが分かった。

梅價は絵詞に顔を近づけると、「これは本当に模写なのですか」と言った。「と申しても、私は本物を見たわけではないが……」

「三部模写するのに一年以上かかったと聞いております」

「線が所々途切れておりますが、模写とはそこまで忠実にするものですか  
な」

「爺、これは剥落写しといって田中先生が始められた模写の方法なので  
す」

「でもお前の模写した絵巻物をいくつか見せてもらったが、こんなふうには描いておらなかったが……」

永恭が困惑した表情を見せた。

「私の模写は大和絵の神髓を会得するためのもので、趣旨が違います。私  
もいつの日か本物をこのように模写したいとは思っております」

一蕙は少しずつ広げて三巻全てを二人に見せ、桐箱に再び仕舞った。

二人は礼を述べて帰ろうとしたので、一蕙が別室で行われているお齋に  
誘ったが、巻物を見せてもらっただけで十分ですと答えて、本堂の階段を  
降りた。

去り際、永恭が「宇喜多先生のお宅にお邪魔をして、田中先生の他の絵  
も見せていただきありがとうございます」と頭を下げた。

「いつでもお待ちしておりますよ」と一蕙は笑顔で答えた。

木屋町二条南にある一蕙の借家に永恭がやって来たのは、それから五日  
後のことだった。

六畳の画室で下絵を描いていた一蕙が花に声を掛けられて玄関に出てみ  
ると、小直衣姿の永恭が立っていた。手には風呂敷包みを提げている。足  
下はさすがに草鞋である。

「ようこそお出で下さいました」

花が手桶に水を入れて持ってくる。永恭は上がり框に腰を下ろして、草  
鞋の紐を解くと、足を手桶に入れた。

「今日は何かの行事がございましたか」

一蕙が声を掛けると、永恭は足を洗う手を止めてこちらを振り返った。

「この服のことでございますか」

「さよう。私どもが昔の衣装を見る機会はそうそうございませんからな」

「これは大和絵の心を我がものにしようと、日頃から心がけておりますゆ  
え……」

「それではいつもそういうご衣装で……」

「そうです」

横で花が微笑を浮かべている。

永恭が花から受け取った手拭いで足を拭くと、一蕙は彼を応接間に案内  
した。

座布団に腰を下ろした永恭が風呂敷を解き、竹皮の包みを取り出した。

詰まらないものでございますがと一蕙の前に差し出す。

「そんなお氣遣いは無用でしたのに……」

一蕙は竹皮包みを手に取った。どうやら草餅らしい。花を呼んで貰い物を引き取らせると、程なくして彼女は煎茶と草餅の入った菓子器を盆に載せて戻ってきた。それらを一蕙と永恭の間に置く。

一蕙は早速草餅を一口食べて茶を飲んだ。

「これは志乃屋の餅ですな。いや上品、上品」

永恭は茶を飲むばかりで餅には手を付けない。ご遠慮なくと勧めても、私は食べて参りましたからと言う。

一蕙が餅を食べ終わるのを待っていたかのように、

「あの軸は田中先生の絵でございますか」

と永恭が床の間の掛軸に目を向けた。

「先生の孝経図です」

「近くに寄って拝見させていただいてもよろしいでしょうか」

「どうぞ、どうぞ」

永恭が膝行して、床の間の前に進み出た。掛軸には、上部に孔子と思しき髭を生やした人物が弟子に語っている姿、下部には玉座に座った人物と彼に礼をしている二人の人物が描かれている。

「仲尼居し、曾子侍す。子曰く、先王に至徳要道あつて、もつて天下を順にす……」

一蕙が孝経を諳んじると、永恭が驚いた表情で一蕙を振り返った。

「それは孝経ですか」

「そうです。孝経は人の道の基本。絵師たる者、絵を描く前にまず人の道をわきまえなければなりません」

「それは先生の教えでもあるのですか」

「先生は口では何もおっしゃいませんでしたが、その背中を見ていると自ずと伝わってくるものです」

永恭が感心したように頷く。

「もつとも実際に儒学を学んだのは、大叔父からでしたけどもね」

そう言って一蕙は悪戯っぽく笑って見せた。

それから永恭に請われるまま、所蔵している訥言の絵をいくつか見せた。維摩居士像とか嵐山雨中図、伊勢海老図など。永恭は絵の隅々にまで目や、時折小さく溜息をついた。さらに賀茂祭礼絵巻の模写を見せると、永恭がさらに興奮するのが分かった。巻物を最後まで広げてから、また最初に戻ってを何回も繰り返した。

賀茂祭礼絵巻を見終わると、永恭が「伴大納言をもう一度見せていただけませんか」と小声で言った。喜んで承知し、画室から桐箱を持ってきて三巻を取り出した。

永恭は先ほど以上にゆっくりと上巻から見えていく。始めはその熱心さを好ましい思いで眺めていたが、半時経つてもまだ中巻を開いているので、さすがに一蕙も倦んできた。

手を叩いて花を呼び、茶を替えさせた。長居をしていることを永恭にそれとなく伝えるためである。しかし永恭は茶も飲まず、巻物に見入っている。

「永恭殿」一蕙は我慢できずに声を掛けた。「私はそろそろ仕事に戻ろうと思いますが、貴殿は心ゆくまでここで絵巻をご覧下さい」

そう言うと、さすがに気づいたのか永恭ははっとした顔をし、急いで中巻を巻き戻した。そして下巻の巻緒を解こうとせず、三巻を一蕙の前に揃えた。一蕙がそれらを桐箱に仕舞うと、「宇喜多先生」と永恭が小直衣の袖を払い、畳に両手を突いて深々と頭を下げた。

「唐突なお願いと存じますが、その伴大納言を私めにお譲りいただくわけには参らないでしょうか」

うん？ 一蕙は永恭の申し出が一瞬理解できなかつた。

「買いたいとおっしゃるのか」

「さようでございます。先生の言い値で買いたうございます」

一蕙は途端に不愉快になった。永恭が我が家の暮らしぶりを見た上で申し出たのではないかと思つたからである。確かに狩野や四条派の絵師たちに比べれば家は借家だし、狭い。衣服も質素だろう。しかし富貴を求めて絵を描くのは絵師の本懐ではないというのが、一蕙の考えなのだ。それは田中先生も同じであつた。

「この前の回忌の時にも申しましたが、この伴大納言は家宝ですゆえ、どなたにもお譲りするわけには参りません」

「私は田中先生の亡くなられた年に生まれた者でございます。ご尊顔を拝することもなく、教えを直接受けることもなく、ただ残された絵のみにて、先生の和絵にかけた魂を受け継がなければなりません。どうか若輩の私を育てるとお思いになって、お譲りいただきとうございます」

永恭が我が家の暮らしぶりを付度しているわけではないことが分かって、一蕙はいささかほっとした。

「永恭殿の先生を慕う気持ち、大和絵に対する情熱はよく分かりました。ただ、伴大納言を売るつもりはありませんので、貴殿さえよければ、ここに通われて模写されてはいかがですか」

永恭が眉根を寄せて、考え込む表情を見せた。

「どうしてもお譲りいただけませんか」

「今申した通りです」

「分かりました。それでは通わせていただきます」

永恭は神妙な顔つきで頭を下げた。

次の日、永恭は大きな風呂敷包みを持って現れた。相変わらずの小直衣姿で、たまたま居た大家がその姿を見て、目を丸くした。

「お公家さんですか」と一蕙の耳元でささやく。いちいち説明するのも面倒なので、そうですと一蕙は答えた。

風呂敷包みの中身は、箱に入った絵道具とドーサ引きをした巻紙である。箱の中には硯と墨に、筆が十本ほど、それに小袋に入った岩絵具がいくつもあった。

「わざわざお持ちにならなくとも、私のところにある物を使えばいいのですのに」

「いや、模写する時はいつも持ち歩いておりますゆえ。慣れた道具を使いたいものですから」

永恭は小直衣を脱ぎ、持参した細紐で白小袖の袂をたすき掛けに縛った。一蕙が桐箱から伴大納言絵詞の第一巻を出して、平机の前に広げると、

永恭は硯に水を落として、ゆっくりと墨を擦った。硯も墨も見たところなかなか高価な物のようだ。狩野の末裔と思わせるだけのものはある。

墨を擦り終わると、「透き写しをしてもよろしいでしょうか」と永恭が聞いてきた。透き写しとは、原本に直接紙を当て、線をなぞっていく模写の方法である。

「いや、それはご遠慮いただきたい」

墨が紙を通して原本に移る恐れがある。家宝だという一蕙が断るのは当然と言えた。

永恭の表情が一瞬曇ったが、「分かりました」と答えると、持参した巻紙を絵巻物の横に広げた。そして細筆を取ると、冒頭の檢非違使たちの姿を写し始めた。そのためらいのない筆遣いを目にして、一蕙はすぐにその才能の非凡なることを見て取った。年少とは思えない筆勢は、彼が今までいろいろな所を回って古画を模写してきたということが嘘ではないことを示していた。やはり狩野の血ということであろうか。

一蕙は自分の息子の松庵のことを思った。どうひいき目に見ても、息子には永恭ほどの才能はない。いや、自分にしても一蕙は心の中で苦笑した。この年頃では先生の絵を写すにしても、筆の動かし方さえ覚え、何度も先生に教えてもらったものだった。

永恭が模写に集中し出すと、一蕙は画室を出て、台所にいた松庵を呼んだ。花と一緒におはぎを作っていた松庵は、手に付いた餡を舐めてから、手拭いで拭くと、一蕙の後について画室に入った。

永恭は二人が入っていても、巻物に覆い被さって、顔を上げない。

一蕙は顎で、永恭の筆遣いを見るように松庵に示した。松庵は静かに近づき、永恭の手元に目をやる。途端にその目は見開かれ、食い入るような目付きになった。その表情の変化に一蕙は安堵を覚えた。相手の凄さが分かるのも、力があるということの証しなのだ。

松庵はまた静かに戻ってくると、一蕙の体を押して画室を一緒に出た。

「あの方はどこのお方なのですか」と松庵が囁いた。

「狩野永泰えいたいという絵師のご子息だ」

「狩野のお方がどうして大和絵を……」

「田中先生の影響だ。先生の絵に感化されたものと見える」

「父上の弟子になられたのですか」

「いや、伴大納言の模写に来ていただけだ」

それから永恭は足繁く模写に通ってきた。一蕙としては彼の才能を見るにつけ、弟子にしたいと思うようになった。今通ってきている三人の弟子にもいい影響を与えるだろうし、何より年の近い息子にはいいお手本になると思えた。

それである時、永恭にそれとなく伝えると、彼は即座に拒否をした。

「私は田中先生の生まれ変わり信じております。私には先生以外の師はございません」

「田中先生から直接教えを受けた私から、学ぶものは何もないとおっしゃるのか」

「その通りです」

永恭の口調にはためらいがない。年少の者の傲岸さと捉えるには、その才能がありすぎた。一蕙は憮然となった。

それでも永恭が模写に通うことは拒否しなかったが、彼の方が来ずらくなつたのか、半分ほど模写したところで、ぱったりと姿を見せなくなつた。

その後、土佐家の所持している田中訥言の伴大納言絵詞写本を永恭が買収しようとしているという噂が入ってきた。しかし土佐家から五十両の提示があつて断念したとも伝わってきた。いくら狩野でもその値段では手が出ないだろうと思われた。無理をせずに家に来ればいいものを、と一蕙は思ったが、永恭は二度と姿を見せなかった。